

六十三 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その十

園丁 それでは再開しましょう。僕の議論はやっぱり穴だらけでしたか？。

莊周 まあ、そうでしょうね。でも、君の夢に出る蝶に言えることはありません。

園丁 あなたはいつもそうやって逃げてしまいます。仕方がない……。ここまでの議論で言い落したことがないか考えてみます。僕たちの対話は、「蝶の雑記帳四十七」で、三浦つとむさんの『認識と言語の理論』について考えたことをきっかけに始まりました。まずそれを思い出して、手がかりを探ってみましょう。

J 言語を手がかりに「認識」を考える

園丁 三浦さんは、「表現以前に頭の中にあるものは言語でも何でもない」と言いました。

しかし、それはあまりにも度を越した物言いでしたね。

莊周 ああ、あれは、近代言語学を切り開いたソシュールの理論に挑戦するためのいわば啖呵ですよ。

園丁 ええ、三浦さんには、ソシュールのマルクス主義的でないところが気に入らなかつたのでしよう。頭の中の言語を否定することに無理があることは分かっていたのではないでしようか。ソシュールは、事物に差異を認めて分節していく言語の働き、対象と表現の対応など、人間が事物を言語によってとらえるやり方を、じつに素直にしたがって根本的に考察してそれを言葉に表現した、それによって、言語学にいっそう普遍的な研究の道を開いた、と僕は思います。それは、言語についての考察ですが、認識の根本に触れるほどのものだった、と思います。そこから物事を構造的に観ようとする構造主義が生まれたのは当然だったでしょう。音や文字として外化したものを言語とした三浦さんも、「正しい認識論をもたない限り、言語論は無価値」としていますから、言語が認識にかかわることを認識していたのです。文末でしめくくる日本語の文に、話者の認識や態度が表明されるといふ指摘は興味深いものでした。ここでもう一つ、物的に外在化された言語に注目する三浦さんの論を掬い取る議論を試してみようと思います。

ここまで僕は、生物の認識を、外界の事物を感覚器官によってとらえ、その情報を神経回路網の一連の処理によって対応可能なものに変換し（これがつまり考えるということですね）、運動神経・筋肉を通じて身体を動かす、というひとまとめの行為として理解しようとしてきました。ところで、言語は、「母」と子のコミュニケーションの場で、

音声として生み出されました。対話では、発話の際と聴き取りの際に思考の神経回路が働いて、外界へ音として言語が紡ぎ出され、その音のつながりを言語として巻き取るのです。発話は運動器官によって音を外界に発し、言語の聴き取りは外界の音を聴覚器官によって取り込むのですから、順序が逆なことを除けば、言語の活動は一般の認識活動と同じことをしていることとなります。言語は、ほかの事物と同じように、生物の認識活動に取り込み可能なものなのです。文字言語が発明されても、視覚を聴覚に加えて用いるだけのことで、言語の連なりを巻き取ってとり入れるのは感覚器官であることに変わりはありません。音声言語よりも前から始まったのかもしれない手話も同じことです。言語が外在してあることは、言語の本質的な契機と言えるでしょう。

だから、人間の認識は言語を運用できるのです。しかも、言語は、身心から紡ぎ出されて巻き取られるあいだ外在化するだけで、紡ぎ出しと巻き取りを駆動するのは身心です。それで、認識作用は言語をからめとって一体化することに成功できたのです。こうして、前回議論したように、言語を用いて思考する人間の認識は高度化したのです。

莊周 今君の言ったことは重要だろうと思います。しかし、言語は、頭の中では未発ではありませんか？。

園丁 えっ、未発？。しかし、外在化を強調しすぎて言語が思考の回路によって紡ぎ出されること、つまり言語が頭の中で生み出されることを否定してはいけない、と思います。その証拠に、人間は自己と対話をします。言語が開発されて一定の言語の体系が整えば、自問自答するようになるのは時間の問題だったでしょう。会話をしているとき、今の言い方は適切でなかったと気づくことがしばしばあります。でも、会話の流れを妨げないように、訂正することはあまりしません。話をしながら思考の回路で言葉をを選んで組み立てるとき、思考の回路系全部を使って論理の整合性を検討するには時間と労力が必要なので、普通は簡便に済ませるのでしょう。しかしあとになって、あの時はこう言うべきだった、莊周さんが言ったことは別の意味だったのではないか、と考えることがあります。具体的な言葉さえ思い浮かべて、その思案がしばらく続くことがあります。これはもう、自分の頭の中での対話ではないでしょうか？。そこでは、言葉が生きて働いています。

莊周 それはそうですが。

園丁 三浦さんの信奉する弁証法は対話の術から発展したものです。よくよく考えて一つの命題に到達したあとにも、相手がさらに考えて最初の命題を否定する命題を出せば、二つの命題は矛盾します。この矛盾を解決（止揚）するには、対話者は、概念を拡張す

るなど高次の議論の枠組みに移らなければいけません。これは対話法ですが、ヘーゲルなりマルクスが独りで弁証法的に考察しているときには、それは自己との対話で、対話は人間の頭の中で行なわれています。頭の中の出来事を唯物論的でないとするのはイデオロギー過剰です。認識を生物学的に神経回路網の働きととらえる僕たちには、弁証法は、思考の回路系全部を使ってあらゆる論理の可能性を探求する方法ということになるでしょう。自己との対話によっては思いつかないことも、他者との対話によって展望が開ける可能性は大いにあります。また、人間の神経回路網では一世代でたどりつけない高みへも、幾世代もかければ到達できるかもしれません。

つけ加えれば、カントの「批判」の方法を、思考の回路系を最大限に活動させてあらゆる角度から考察することと解釈すれば、批判は弁証法につながるでしょう。物理法則に従って展開してきた宇宙史という観点から、対象である事物の側に弁証法的な発展があったとする見方は、たしかに、事物を動力学的にとらえるのに有効でしょう。しかし、思考の回路系が生み出す理性の果てしない推論に限界があるとするとカントの智慧を無視すれば、ヘーゲルのように、歴史を「理念」のしからしめるものとする超越に至ってしまうでしょう。

莊周 言語から離れて、あまりに哲学的な話になっていますよ。

園丁 いけませんね。貧弱な頭をついでに整頓しておこうとして、議論が逸れてしまいましたが。言おうとしたのは、自己との対話でも言葉が交わされているということです。言葉がたしかに頭の中にあるとしなければいけません。あなたはまだ、それが未発だと言われますか？。僕が書物を読むときのことを思い浮かべてみましょう。書物を読むのは他者との対話ですが、著者の書いていることを自分のもののようにして思考することで理解は向上します。黙読のはずなのに僕は、しばしば口と舌と声帯を動かしてささやくように声を出していることがあります。それを耳は聞いています。声を出さないときにも、口と舌と声帯はほとんど動いていて、耳骨がそれを聴いているように思います。この場合、言語が発現して、それを聴いていると言っても誤りではないでしょう。

先ほども言ったように、発話するとき、言葉を選び、それを文法に則るようにつなげます。僕は、文法は思考の回路の論理演算に適合するように形が決まると考えたのですが、異なる自然言語を話す人はそれぞれ異なる言葉と文法を参照します。ですから、どういうやり方にせよ、言葉も文法もすぐに取り出せ参照できるように、脳の神経回路網に組み込まれているのです。結局、言語は頭の中にあるのです。言語学者は、音や文字に表現された言語を聴かず見もせず、自分の頭の中に表象として浮かぶ言語を論じる

ことができるのです。

莊周 わたしが「未発」と言ったので長々と理屈を並べさせてしまいました。申しわけない。気分を変えて話を進めてください。

*

園丁 かつての哲学で認識を考察するとき、言語のことは当然のように前提していて、言語の働きをあらゆるさまに登場させて論じることが少なかつたように思います。しかしそれでは、言語を用いるようになって質的に変化した人間の認識と思考を十全に取り扱ったことにならないのではないのでしょうか。

カントは認識の主体に注目することで認識論に画期をもたらしました。主体が自己との対話によって深める認識は主観的なものだということになります。そこで、“母”と子の対話に戻って考えてみましょう。二人の対話者が外界の対象をいっしょに見て言葉を交わしているとします。すでに成人した二人なら、永井さんの言うように、お互いに相手が心の中で何を考えているか知らないかもしれせん。でも、母と子の外界の対象についての会話は、子が外界とのかかわりに成功することができるような認識に近づこ

うとして居るのです。言語をつくり出す場で、あるいはそうでなくても、母と子は、対象を自分がどう見ているか、何とかして相手に伝えようとします。そして、会話が理想的に成功したときには、二人は共通の認識をもつのです。これが客観というものでしょう。思考がそういう契機をもつ言語を用いるようになったことで、客観的認識の道が開けたのです。すなわち、言語を用いる思考は客観的認識を旨とせず、ひるがえって、自己との対話においても、主観は、言語を頼りに、客観的認識に近づいていくことができる、と僕は考えます。

莊周 なるほど。君は、主観と客観をそのようにとらえるのですか。

園丁 言語をはつきり登場させることでそう考えることができるのですが、生物学的に観れば次のように言えるでしょう。進化によって言語を用いるようになった人間の思考の神経回路系は、そのすべての論理演算を尽くせば、外界について客観的に十分真理だと言える結論に近づける、と。しかしそれでも、言語を運用する人間の思考の神経回路系は、実在する外界を認識するためのもので、実在を論証することはできません。思弁すなわち言語を用いる思考によって外界の客観的実在を論証しようとするメイヤスーさんの議論は逆立ちしているのです。カントはこういうことをよく認識していた、そして、僕はそれに教えられてこのような解釈を得たのだ、と思います。

莊周 君は、言語を用いる思考という観点から認識を解釈しようとしています。それでは、意識の問題をどう考えるのですか？。

園丁 ああ、一番むずかしい問題を訊いてきましたね。僕の能力ではあやふやになるので、用心して、外界の対象の認識に限って議論してきたのに……。意識は一般に心と呼ばれているものと重複すると思いますが、それを話題にするとなれば、人間の生活全般から生じる広い意味の認識を考えなくてはいけないでしょう。あとで心についても考えてみたいですが、僕には意識や心を十分議論する力がないことを予めお断りしておきます。

莊周 ともかく、人間の思考が言語を用いることがそれほど重要なら、その観点から意識を論じることを避けてはいけません。

園丁 僕は、アトマンの实在を肯定しないというゴータマ・シッタールタの立場をとりますから、永井さんの意識は実在しないという論に与します。このことは前に言いました。永井さんは、意識をとらえようとすると、とらえたと思った意識はすぐに対象となつて、意識作用自体は姿を見せず実働している、というように論じました。その永井流の物言いが成立するのは、意識には言語が伏在しているからだと思います。

異常な状態ではない場合、ピアノストがピアノを弾きながら聴いているように、言葉

を話している僕は話していることを聴いていると思います。言葉を組み立てながら、それをモニターしているのです。最も単純な神経回路を想い出してみましょう。アメフラシのエラ引き込み反射で、線形的な回路に副回路を接続して調節する機構がありました。これはモニターと言えるでしょう。人間の言語を用いる高度な思考の回路系でも、そういうモニターリングの副回路が組み込まれているのだ、と僕は考えます。そして、人間は言語を運用して思考していることを意識することができます。しかも、意識作用は、モニターリングしていることも意識できます、モニターリングしていることもモニターしているかのように。なんだか永井さんの物言いに似てきましたが、人間の意識を析出する神経回路系には、多段階のモニターリング機能があるのではないのでしょうか？。

前回、チョムスキーさんの議論のように言語の規則が構造依存的になるのは、思考の回路系が部分構造をもつ階層的なものだからだろうと想定しました。ほとんど無限に文章を組み立てることができること、理性が果てしない推論を展開できることの基礎には、思考の回路系の階層構造があるのでしょうか。思考の回路系の作動をモニターする副回路も多層的になっていて、多段階のモニターリング機能があるように思えるのではないのでしょうか？。意識作用が意識を逐次多段階的にとらえていけるのも、同じ機構のおかげではないのでしょうか？。

莊周 また、疑問符だらけになってきましたよ。

園丁 ええ、今しゃべっていることは僕のあやふやな想像にすぎません。人間の精神の神祕が僕のような者に判るはずはありません。

莊周 そう言ってしまうと、わたしたちの間答は立ち往生します。君は、せっかく思考の回路系のモニタリングを意識につなごうと試みたのに、それを途中で放り出して逃げたいけません。

園丁 まだしんどい作業を続けろというのですか。ふー。

ひるがえって、ヒトが言語を開発する以前には、「意識」ほどのようなものだったのでしょうか？。言語なしに視覚や聴覚などによって得た表象をどのように整頓して把握し、意識していたのでしょうか？。「類人猿」と僕が景色を眺めて立っているとしましよう。彼が言語を獲得できていないなら、彼と僕の心象風景を同じと考えるはいけないかもしれません。彼の心象風景にはナレーションがないのです。それを見ている彼は、自分をその風景の中に立たせることができるでしょうか？。意識が意識するのは実働している意識作用そのものではないとしても、意識は自身を客観視しようとしているのです。言語がなければ、先ほどの言語を仲立ちとした主観と客観の議論をそのまま適用す

ることができません。

景色を眺めて立っている「類人猿」の意識は、自覚なしに知覚が構成する外界と直接向き合っていて、認識は思考の回路で実行されるのですが、反応はすぐに行為になって出現する、ということではないでしょうか？。言語がなくて、反省のような精神作用をすることができるといいますか？。反省がなくて自己を意識できるでしょうか。

ここで、言語が外在するという契機は重要だと思えます。自己との対話でも、認識作用は仮構的に外在する言語を認識しているのだと思います。主体がくり返し登場する言語を認識することが、いつしかモニタリングの機能を意識できるようにした、と考えることはできませんか？。それは、やがて多段階的なモニタリングを可能にした、と。もちろん、その働きは、何らかのやり方で思考の回路系に組み込まれるのでなければいけません。でもこれも、肝心のところを脳神経系の進化にゆだねることですね。

莊周 人間の意識は、言語を用いて思考できるようになって以後今のようになった、という君の主張は、君の想像にすぎませんね。結局、君は、現に人間がしていること、すなわち、言葉話していることを意識でき、思考していることを意識でき、そう意識していることを意識できることを、何か根拠があるように解釈しただけですね。

園丁 うーん。

園丁 哲学者たちが意識と呼んで議論しているものが、人間の神経回路網からどのようにして生じるか僕たちは知らないということですよ……。しかし、意識したことを表現できるのはやっぱり言語があるからです。

僕たちは、外界を次々に分節してよいよ詳細に認識し、それを総合するのに構造的に組み立て、認識の体系をつくり上げます。一人の人間のする認識は部分的でもそれを広げていき、人類のほぼ共通の認識の体系はますます広がっていきます。今日僕が議論してきたことからすると、その認識は言語を用いて構成されるのです。なぜなら、言語こそ、分節を事とし、文を構造的に組み立てていくものだから。一人の人間は彼にできるほどの認識を言語によって脳神経系に蓄えます。それを彼は意識できます。つまり、彼の意識は外界の認識を脳に保持するのです。文字記号を発明してからは、多数の人間の認識が記録して残され、それらは、内部に齟齬を含むでしょうが、全体としてたいへん大きな認識体系を形作るようになりました。それは時間に耐えて発展していきます。こうして、人間の意識は、対面している外界について極めて多くのことを識っていて、自身が極めて大きな内容の知識を保持していることを知っています。意識にとつては、豊饒な外部世界と意識の世界があるのです。これが、意識をもつ僕が日ごろ感じている

「わたし」ですね。無難に言えばわたしは身心ですが、心は身体の変容であると言った賢人があったし、現代科学が精神作用は神経系全体のつくりだすものとしすから、意識は譲歩してそれも認めるかもしれません。しかし意識は、自身の非存在を承認することができかねます。この一点に、昔から哲学者たちが論じてきた人間存在の問題があります。

莊周　とうとう、君は哲学の根本問題に突き当たったわけだ！。

園丁　そう言いますが、進化論を受け入れて生物学的に考えてきた僕には、見てきたように、あっさりした問題です。僕の立場からすれば、意識の世界は、外部の世界を言語を用いて写し取った世界です。意識を主として実在する外界を従とする考え方の人にだけ、この問題が重大なのです。フッサールは、そういう哲学を築くために、外部世界を現象学的還元によってカッコに入れて意識の中に入り込み、意味を探そうとしました。二十世紀後半にも、日本の井筒俊彦は、仏教哲学の唯識を継承して（イスラム神秘主義も研究して）意識を主とする哲学を構築しようとしていました。インドにはヨーロッパよりも古くから意識を考え尽くそうとした流れがあったのですね。ヨーロッパの近代哲学への道を開いたデカルトは、意識とともに外部世界を両立させようとした点で、むしろ妥協的だったと言えます。

荘周 デカルトさんは、心（意識）を救うために脳内にその座を求め、「松果体」がその座ではないかと考えたようですね。それでは、君は、意識が脳内でどのようなあり方をしていると考えますか。

園丁 脳科学の研究が言語を運用しているとき脳神経系のどこが一番活動しているか調べようとして、まだ解明できていません。僕は、根拠を言えませんが、言語の階層構造的な働きが脳の狭い部位でつくり出されるとすることに懐疑的です。だから、意識の座を脳の部位に探すことを疑問に思います。僕は、意識は言語を用いる思考の回路系全体が働いているのをモニターする機構から発生した、と想像していますからね。とにかく、とてもむずかしい問題です。現代の科学的な研究で解明できるか見通せません。かといって、チャーマーズさんのように考えてはいけません。

荘周 おやおや、君はなかなか巧みに哲学者を批判しますね。

園丁 僕は、批判のために批判しているわけではありません。カントの「批判」に戻りましょう。カントは、意識そのものにそんなに深入りしませんでした。カントは意識の代わりに統覚という言葉を使っていますが、その現実的な働きに言及しているだけです。その働き、僕の言い方だと言語を用いる思考の実際の働きを洞察して論じることの方が

大事だと考えたのだと思います。独りの人間は、実在の外界と対面し内部に意識の世界を感じています。カントは、この現実を主体的な認識の課題としました。人間が現実に行なうことを受け入れて、感性や悟性という認識の能力が経験に先立ってあり、認識の論理形式も具えているとしました。それによってカントは、デカルトの二元論を超え、経験主義をも超えました。僕は、生物の進化論を受け入れれば、カントの言う能力は人間にあらかじめ具わり、事象を論理的に整理する能力が言語によってもたらされることを論じて、カントの認識論を確認することができた、と思います。僕の議論はまったく不十分ですが、そういうふうな結論に至りました。

莊周 そうやってまた、君はカントに戻ってきましたね。もたもたしながらだけれど、なんとか認識に言語を結びつけて、まがりなりにも一つのみとまりをつけることができましたね。労をねぎらうことにしましょう。

園丁 僕の悪戦苦闘を少しでも評価くださって、ありがとうございます。ほんとうにありがとうございます。